二〇二五年度　入学試験問題

文学部A方式Ⅰ日程・経営学部A方式Ⅰ日程・人間環境学部A方式・GIS（グローバル教養学部）A方式

二限　国　語　（60分）

〈注意事項〉

一　試験開始の合図があるまで、問題冊子を開かないこと。

二　解答はすべて解答用紙に記入しなさい。

三　志望学部・学科によって解答する問題が決まっている。問題に指示されている通りに解答すること。指定されていない問題を解答した場合、採点の対象としないので注意すること。

四　マークシート解答方法については下記の注意事項を読みなさい。

五　問題冊子のページを切り離さないこと。

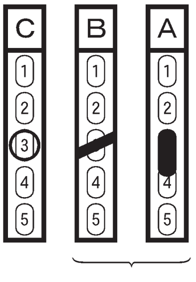
マークシート解答方法についての注意

マークシート解答では、鉛筆でマークしたものを機械が直接読みとって採点する。したがって、解答はＨＢの黒鉛筆でマークすること（万年筆、ボールペン、シャープペンシルなどは使用しないこと）。

一　記入例　解答を3にマークする場合。

㈠　正しいマークの例

㈡　悪いマークの例



枠外にはみださないこと。

○でかこまないこと。

二　解答を訂正する場合は、消しゴムでよく消してから、あらためてマークすること。

三　解答用紙をよごしたり、折りまげたりしないこと。

四　問題に指定された数よりも多くマークしないこと。

●文学部を志望する受験者は、問題〔一〕〔二〕〔三〕に解答せよ。

●経営学部・人間環境学部・GIS（グローバル教養学部）のいずれかを志望する受験者は、問題〔一〕〔二〕〔四〕に解答せよ。

〔一〕　つぎの文章は、『Liberty 2.0――自由論のバージョン・アップはありうるのか？』という論集に収められた文章の一節である。これを読んで、後の問いに答えよ。

最も成功したナッジの例として、オランダ・スキポール空港にある男性用小便器がある。小便器の下方に小さなハエのイラストを付すと、尿はねを防ぐことができ、その周辺の清掃費用が大幅に削減したという。これは「標的があるとそれを狙いたくなる」という人がもつ傾向を利用したものである。

ナッジ（**nudge**）とはもともと「肘で軽く突く／そっと後押しする」という意味の英単語だが、そこから転じて、命令等の強制手段をとることなく、人の行動を特定の方向へと誘導する手段を指すようになった。ソフトな形で人々の行動変容を促す技法として近時注目を集めている。ナッジの代表的論者である経済学者リチャード・セイラーと法学者キャス・サンスティンは、それをかつて「リバタリアン・パターナリズム＊ **libertarian paternalism**」という一種の思想として展開した後、その技法面をより強調した「ナッジ」として[1]人口に膾炙（かいしゃ）させた。彼らの著作は豊富な事例の紹介がある一方で、多様なナッジ的技法を貫通する体系的な理論が見通しづらい難点もあった。

本章は、こうしたナッジに関する理論を「ナッジ論」と名付け、サンスティンの議論を中心にナッジ論を整理することを目的とする。　（中略）

精確なナッジの定義は、「選択を禁じることも、経済的なインセンティブ＊を大きく変えることもなく、人々の行動を予測可能な形で変える選択アーキテクチャ＊のあらゆる要素」である。選択アーキテクチャとは、選択肢の提示方法、選択に至るまでの情報提供の態様等、人が何らかの選択をする際に置かれる環境一般を意味し、これを変化させる主体を選択アーキテクトと

呼ぶ。選択アーキテクトは政府でも民間企業でも一個人でもよい。

この定義は、①義務づけや禁止、それらに伴う制裁がなく、②課税や補助金のような経済的負担・利益もないか微少である、という二つの性格をもちながら、人々の行動を変容する技法を総じて含むものである。（中略）

ナッジ論の誕生には三つの背景が存在する。第一に行動経済学である。伝統的経済学においては、経済人＝ホモ・エコノミクス（エコン）という人間像が想定されていた。人間は経済合理的に、すなわち自己の経済的利益を最大化するように行動するという想定である。行動経済学はこの想定に疑問を突き付けた。実験心理学等の方法と知見に依拠して、[2]エコン想定から逸脱する人間の行動を明らかにし、この逸脱行動こそが人間一般に観察される傾向性（ヒューマン）であると考えた。そして、経済現象の解明や規範的提言のために、経済学はこうしたヒューマンとしての人間像に基づいて理論を立て直す必要があると主張したのである。

現実の人間がエコン想定から逸脱するのは、人間の認知過程にバイアス*がかかっているからである。認知バイアスの例としては次のようなものがある。

・確証バイアス…自分の信念や仮説に沿う証拠だけを収集したり、都合のよい形で情報を解釈したりするバイアス。
　（例）「血液型がO型の人は大雑把な性格である」という情報を得た結果、身近にいるO型の友人の大雑把な行動が気にかかるようになり、先ほどの性格診断への確信を深める。

・アンカリング…特定の情報・数値に過度に気を取られ、そちらに引きずられる傾向のこと。（例）日常的には五万円の買い物には慎重になるのに、五〇〇万円の自動車を購入する際には、オプションのカーナビ五万円が安く感じてしまう。

人間は放っておくと、こうしたバイアスにより合理的な判断に基づく行動ができないことが多い。そこで、時にバイアスを回避させ、時にバイアスをむしろ利用することで、人々の行動を合理的なものへと変化させる技法が生まれた。それこそナッジである。ナッジの技法の背後には、このようなバイアスを用いたメカニズムがあり、それを明らかにした行動経済学の誕生・発展が控えている。

第二に、アーキテクチャ論の継受である。憲法・サイバー法学者のローレンス・レッシグは、一九九九年発表の『コード』という著作のなかで、一定の行動を禁止したり義務づけたりする法規範以外にも、人々は様々な要素から規制を受けていると論じた。そのひとつに、物理的・技術的環境を意味する「アーキテクチャ」が列挙された。たとえば、公園に居住するホームレスの人々を退去させるために、彼らが寝床として利用しているベンチの座面に仕切り棒を設置し、人が横になることを困難にするという対策がとられることがある。ベンチの座面設計という物理的環境によって横になる行為が不可能ないし困難にされていることを捉えて、人々の自由がアーキテクチャによって規制されているとするのである。提唱者のレッシグはアーキテクチャのなかでもインターネット空間のプログラム設計を「コード」と呼び、コードという一種のアーキテクチャによる人々の行動規制を警戒的に論じたのだが、その後、アーキテクチャ概念はそうしたコードを超えてより広い意味で用いられるようになる。ナッジも物理的・技術的なものを含む形(選択アーキテクチャ!)で、より広く人々の行動を非強制的な形でコントロールしようとする点で、このアーキテクチャ論の潮流に与(くみ)するものといえる。(中略)

もっとも、(レッシグ的な)アーキテクチャは逸脱することが不可能ではないにせよ事実上困難であるという性質を有しているのに対して、ナッジはむしろ[3]逸脱可能性を担保するところに特徴があるという点で差異があることには留意すべきである。

第三に、アメリカの政治文化である。アメリカにおいては、政府による強制を伴う施策を社会主義的であるとして嫌う文化があり、政府の役割をめぐって共和党と民主党の対立がしばしばみられる。ナッジは強制しないというその特徴を存分に活かすことで、そうした対立に巻き込まれることなく――とりわけ政府による強制に反対する傾向の強い共和党からの反発を抑制しつつ――、福祉国家的政策を推進するための技法として発明されたという側面を有している。これはサンスティンも認めており、その著書の旧版において、ナッジはアメリカにおける両派対立の[A]緩ショウを企図していたことを明記し、新版でそうした企図が一定の成功を収めたと自己評価しているのである。

数多くの著作のなかで、サンスティンは様々なナッジの例を紹介している。確定拠出型年金へ自動加入(脱退可能)する制度を設計すること、健康的な栄養素配分を一枚の皿を模したイラストで視覚的に示すこと、たばこのパッケージに健康を害する

旨の説明文を掲載すること、税金未納世帯への督促文中に周辺地域での納税率の高さを占めるデータを添えること、等々。さらには、法律の任意規定（当事者の合意等により従う必要のない規定）や天気までも——悪天候は人々の外出の意欲を削ぐという意味で——ナッジということもある。4ナッジの定義が二つの観点から排除的になされているがゆえに、多種多様なものがそれに含まれてしまうことは必然であった。サンスティン自身、ナッジ一般を議論するよりも、ナッジの種類ごとに検討が必要であるといっている。ここでは試論的にナッジを三つの観点で整理し、それらの組合せとして多様なナッジの技法を分類することで、見通しを良くしたい。

　第一に、ナッジの有無・程度による整理である。具体的には、①選択環境に積極的にかかわらない（ナッジしない）という「能動的選択　**active choosing**」、②選択者の一般的な傾向に基づいてナッジするという「非個人化ナッジ　**impersonalized nudge**」、③選択者個々人の選好等に応じてナッジの内容を変えるという「個人化ナッジ　**personalized nudge**」の三つに整理することができる。

　第二に、ナッジが利用しようとする認知過程の種類に応じた整理である。認知心理学では「二重過程理論」という人間の認知過程をシステム１／２に区別して考えるものがある。システム１は高速・自動的・直観的処理を行う過程である。１＋４のような単純な計算などで用いられるものであり、素早い判断と行動を可能にする一方、これこそが認知バイアスの原因でもあり、人間の合理的とはいえない行動をしばしば招く。システム２は低速・計算的・熟慮的処理を行う過程であり、５２３×１４５のような複雑な計算などで用いられる。判断には時間を要するが、必要な情報を適切に分析して合理的な行動をとることに役立つ。ナッジは、人間がシステム１で行動し、合理的とはいえない行動を行う事項につき、ある時は別のシステム１を利用して合理的な行動へと人を誘い、別のある時はシステム２の発動を刺激し人々に熟慮を求めることで合理的な選択を実現しようとする（システム２を利用したナッジは「教育的ナッジ」や「ブースト」という別称がある）。

　第三に、利用する選択アーキテクチャの種類による区別である。具体的には、①情報提供を行うもの、②選択肢のアレンジメントを工夫するもの、③デフォルトルール（初期設定）を用いるもの、の三つに整理できる。①〜③の差異は相対的だが、た

とえば、電力プラン選択時に省エネプランによる節電効果を資料で示すのは①に、レストランがオススメの料理をメニュー表に大きく表示するのは②に、*ＥＣサイトに登録すると別途配信停止手続きをとらない限りそのサイトから広告メールの送信が続くのは③に、それぞれ<u>ガイ</u>(B)当する。

多くのナッジは、これら三つの観点の組合せとして整理することができよう。たとえば、セルフ式の学食・社食で肥満防止策の一環として、ヘルシーな料理を取りやすい位置に、脂っこい料理を取りにくい位置に配置するというナッジは、〈 X 〉と整理できる。

（瑞慶山広大「ナッジ——自由を保障する公共政策の技法・思想・実装」より。文章を一部省略した）

【注】

*リバタリアンパターナリズム　リバタリアンは「自由至上主義の」の意。パターナリズムは「（支配者側からの）父親的温情主義」の意。二つの異なる主義を組み合わせた造語。

*インセンティブ　報奨金など、行動や意欲を起こさせるための刺激・誘因。

*アーキテクチャ　構造。構成。

*バイアス　偏向。先入観。

*ＥＣサイト　商品やサービスの売買が電子商取引によって行われるウェブサイト。

問一　傍線部1「人口に膾炙（かいしゃ）させた」の意味として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア　公共の利益に資するようにした。
イ　人から人へ噂（うわさ）が伝わるように仕組んだ。
ウ　肯定と否定、両方の意見を生んだ。
エ　対話をくりかえして親和性を高めた。
オ　広く人々に知れ渡るようにした。

問二　傍線部2「エコン想定から逸脱する人間」とあるが、どういう人間か。最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア　経済的な利益と損失を最優先に考えるという通俗性から脱却して、ナッジの技法を身につけた人間。
イ　人々の行動を強制的な形でコントロールしようとするアーキテクチャに対し、異議を唱える人間。
ウ　認知過程にはさまざまなバイアスがかかっているという行動経済学の考え方に当てはまらない人間。
エ　利益が大きくなるよう合理的に行動するはずだという伝統的な経済学の予想から外れてゆく人間。
オ　人間一般に見られる傾向性（ヒューマン）を重視し、経済的合理性に疑問を抱くようになった人間。

問三　傍線部3「逸脱可能性を担保する」とあるが、どういう意味か。つぎの形式にしたがって、三十字以上、四十字以内でまとめ、解答欄に記せ。ただし、句読点や記号も一字と数える。

［　　　　　　　　　　］という意味。

（下書き用）

30　40

という意味。

問四　波線部A「緩ショウ」B「ガイ当」のカタカナ部分の漢字表記として正しいものをつぎの中からそれぞれ選び、解答欄の記号をマークせよ。

A　ア　渉　　イ　障　　ウ　衝　　エ　訟　　オ　奨

B　ア　劾　　イ　慨　　ウ　該　　エ　蓋　　オ　概

問五　傍線部4「ナッジの定義が二つの観点から排除的になされている」とあるが、どういうことか。最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア　選択者個々人に対応したナッジと、選択者の一般的な傾向に基づくナッジとが、齟齬（そご）をきたしている、ということ。

イ　義務も禁止もなく、経済的負担も利益もない、という二つの否定文でナッジが規定されている、ということ。

ウ　ナッジは、思想的な展開と技法的な発展という二方面の進化を経て、存在意義を確かなものにした、ということ。

エ　サンスティンによるナッジ理論と、レッシグによるアーキテクチャ理論の間で、軋轢（あつれき）が生じている、ということ。

オ　行動を強制せず、なおかつインセンティブを与えるという二つの方策は、ナッジの思想と相容（あいい）れない、ということ。

問六　空欄 X に入る表現として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア　非個人化ナッジ　×　システム1　×　選択肢のアレンジメント

イ　個人化ナッジ　×　システム2　×　選択肢のアレンジメント

ウ　非個人化ナッジ　×　システム1　×　デフォルトルール

エ　個人化ナッジ　×　システム1　×　情報提供

オ　非個人化ナッジ　×　システム2　×　情報提供

問七　本文の内容に合致するものをつぎの中から一つ選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア　人間が自分の考えに沿う情報ばかりを集めたり、情報を都合よく解釈したり、特定の情報に引きずられたりするのは、ナッジによって思考が誘導されているからである。

イ　たばこのパッケージに健康を害する旨の説明文を載せるのは、二重過程理論におけるシステム2を発動して、喫煙者のデフォルトルールを改変するためである。

ウ　アメリカでは共和党と民主党の対立があり、社会主義的な施策が実施されにくいため、サンスティンは、行動経済学の知見に基づく緩やかな法改正を提案した。

エ　公園のベンチの座面に仕切り棒を設置してホームレスが横たわれないようにした設計に対し、レッシグは、行動の自由を規制するアーキテクチャだと論じた。

オ　福祉国家的政策を進めるためにナッジは発明されたが、近年では、税金や電力料金の説明にナッジが使われるなど、支払いシステムを補完する運用が目立っている。

〔二〕　つぎの文章を読んで、後の問いに答えよ。

*和州菩提山の本願僧正の御房に、忠寛正信房と言ふ僧ありけり。あまりに眠りければ、眠り正信とぞ申しける。*御舎利講の*散華すべかりけるが、*唄ひく程に、例の眠りけるを、唄終りて、1そばなる僧、驚かしければ、眠りながら、また、2物忽なる僧にて、*錫杖取りて、「手執錫杖」と誦みけるを、「いかにや」と言はれて、「やら、唄かと思ひて」とぞ言ひける。

また、ある夜の*番に、鳥の鳴きけるを、眠り耳に、*御所に、「忠寛、忠寛」と召すと聞きなして、事々しく御いらへ申して、御所へ参る。3「いかに、何事ぞ」と仰せければ、「召しの候ひつる」と申す。「さる事なし」と仰せありければ、鳥の、なほ空に声するを指さして、「あれに召しの候ひつる」と申しける。

ある時、*御湯の汗に濡れたる御小袖を、伏籠に打ち掛けて、例の物忽は、濡れたる方を上にして、盛りなる火にあぶりて、眠り居たる程に、「疾く参らせよ」と、仰せのありけるに、驚きて見れば、白き御小袖に、伏籠の形つきて、香色に焦がれてけり。「　X　」と思ひて、かいまきて、濡れたる方を上にして、持ちて参りぬ。「いまだ濡れたるはいかに」と仰せらるれば、4「ただ奉り候へ。下は焦がれて候ふ」とぞ申しける。「*尾籠なり」と仰せられて、御小袖は給はりてけり。

近き比、興福寺の東門院に児あり。*隠所に居たりけるに、春日山の方より、*鵄一つ来りて、この児の前に眠り居たり。恐ろしさに、腰刀を抜きて、ふたと斬りて、やがて*絶入したりけるを、人みつけて、坊へ舁き入れて、祈りけり。刀に血付き、鵄の毛散りたりけり。さて*口走りて、「忠寛が何となく眠り居たるを、誤ちたる事、安からず」と言ひけり。5とかく祈りこしらへて、別の事なかりけり。先生にも眠りしが、生を隔てても眠りけるにこそ。

習因習果と言ふ事侍り。弁へ知るべし。常に心に思ひ染み、身にし慣れぬる事は、生を経れども、相継ぎて忘れず、捨て難くして、自らせられA、思はるるBなり。

（『沙石集』より）

【注】

- ＊和州　大和国。今の奈良県。
- ＊御舎利講の法要　仏舎利（釈迦の遺骨）に供物をささげその功徳を讃える法会。
- ＊散華　花をまいて仏に供養する法要。ここではその時に行う四種の法要（梵唄・散華・梵音・錫杖）の一つを指す。
- ＊唄　梵唄。法会の始めに四句の韻文を唱えて仏の徳を讃える作法。
- ＊錫杖取りて　錫の杖を手に取って。「手執錫杖」等の四句の韻文を唱えつつ一節の終わりごとに錫杖を振る、法要の最後の作法。
- ＊番　宿直。寝ずに番をする。
- ＊御所　本願僧正をさす。
- ＊御湯の汗に濡れたる御小袖　入浴した僧正が着て汗で濡れた、袖口の狭い肌着。
- ＊隠所　便所。厠。
- ＊鵄　タカ科の鳥。鵄は天狗（天上や深山に住むという妖怪）と同一視された。
- ＊絶入したりける　鵄を切りつけた瞬間に、鵄に生まれ変わっていた忠寛の霊が、児に取り付き、児が気絶した。
- ＊口走りて　祈禱の力に負けて忠寛の霊が現われ、児の口を借りて語り出して。

問一　傍線部1「そばなる僧、驚かしければ」とあるが、「そばなる僧」はなぜ「驚かし」たのか。その説明として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア　居眠りをしている忠寛を見てその冷静で大胆な態度に感動したから。
イ　法要が進んで忠寛が担当するはずの散華を行う順番になったから。
ウ　法要中に居眠りをしている忠寛を驚かせて笑い者にしようと思ったから。
エ　法要が滞りなく終わったので忠寛を起こして帰ろうと思ったから。
オ　どこでも居眠りができる忠寛の態度をうらやましく思ったから。

問二　傍線部2「物忽なる僧」の意味として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア　わがままなお調子者の僧
イ　危険な乱暴者の僧
ウ　正直な律義者の僧
エ　そそっかしい慌て者の僧
オ　穏やかなのんびり者の僧

問三　傍線部3「いかに、何事ぞ」と言ったのはなぜか。その説明として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア　宿直の番をしているはずの忠寛が勝手に役目を投げ出したから。
イ　眠り正信と言われた忠寛が自分から目覚めてやってきたから。
ウ　自分が静かに眠っていたところに周囲が大騒ぎをしているから。
エ　自分には忠寛を呼ぶ理由がないのに周囲の人が連れてきたから。
オ　呼んだ覚えのない忠寛が突然自分の目の前にやってきたから。

問四　空欄 X には、あまりのことに驚きあきれるという意味の語が入る。その語として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア　をかし
イ　うつくし
ウ　あさまし
エ　ゆゆし
オ　すごし

問五　傍線部4「ただ奉り候へ」の意味として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア　そのままお召しください。

イ　そのまま差し上げてください。

ウ　何も言わずにお受け取りください。

エ　そのままご下賜ください。

オ　そのまま我慢をしてください。

問六　傍線部5「とかく祈りこしらへて、別の事なかりけり」の意味として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア　とにかくすぐに祈禱をしてその場をしのいだが、大した効果はなく児は生き返らなかった。

イ　あれやこれやと祈禱をしてなだめたので、それ以上の大事にはならず児は無事だった。

ウ　いつものように祈禱をして周囲の人々の心を落ち着かせ、危急の事態に対処しようとした。

エ　ゆっくりと祈禱の準備をしたので、大きな失敗をすることはなく、忠寛は目を覚ました。

オ　さまざまに祈禱の仕方を教示したが、誰もそれを素直に実行することはできなかった。

問七　二重傍線部A「られ」B「るる」はともに助動詞であるが、その文法的な意味として最も適切な組み合わせをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア　A　受身　・　B　尊敬
イ　A　可能　・　B　可能
ウ　A　自発　・　B　自発
エ　A　受身　・　B　可能
オ　A　自発　・　B　尊敬

問八　本文における筆者の主張として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア　人間は少しずつでも徳を重ねればいつかは必ず仏によって救われるものである。
イ　人間は普段から善い行いをしていれば必ず周囲からも正しく評価されるものである。
ウ　人間はたとえ悪事を犯しても改心すればよい結果がもたらされるものである。
エ　人間はいくら努力をしても生まれながらに備わっている運命には逆らえないものである。
オ　人間は習慣的な行いによって善い報いや悪い報いがもたらされるものである。

●つぎの問題〔三〕は、文学部を志望する受験者のみ解答せよ。

〔三〕　つぎの文章を読んで、後の問いに答えよ（設問の都合で返り点・送り仮名を省いた箇所がある）。

*禰衡字正平、平原般人也。A少有才弁、而尚気剛傲、好矯時慢物。（中略）

融既愛衡才、数称述於曹操。操欲見之。而衡素相軽疾、自称狂病、B不肯往、而1数有恣言。操懐忿。而以其才名、不欲殺之。聞衡善撃鼓、乃召為鼓史。因大会賓客、閲試音節。諸史之撾者、皆［ X ］脱其故衣、更著岑牟単絞之服。次至衡。衡C方為漁陽参撾、蹀躞而前、容態有異、声節悲壮、聴者莫不慷慨。衡進至

操前而止。吏訶之曰、鼓史何不改装、而軽敢進乎。衡曰、諾。於是先解祖衣、次釈余服、裸身而立、徐取岑牟単絞而著之。畢、復参撾而去、顔色不作。操笑曰、本欲辱衡、衡反辱孤。

（『後漢書』より。文章を一部省略した）

【注】

＊禰衡　後漢の人。

＊平原般　平原郡般県。現在の山東省楽陵の西南。

＊尚気剛傲　義気を重んじ、強情傲慢。

＊矯時　時勢に逆らう。

＊融　孔融。後漢の人。

＊称述　称賛して述べる。

＊曹操　三国の魏の武帝。後漢の献帝の時、功によって丞相となり、魏王に封じられた。

＊撾　太鼓を打つ。

＊岑牟単絞　鼓史のつける帽子と青みがかった黄色のひとえの衣。

＊漁陽参撾　鼓曲の名。参撾は太鼓を打つ型をいう。

＊蹀躞　小股であるく。

＊慷慨　心を高ぶらせる。

＊衵衣　肌着。

＊怍　はじる。

問一　波線部A「少」B「不肯」C「方」D「徐」の読み方として最も適切なものをつぎの中からそれぞれ選び、解答欄の記号をマークせよ。

A　少

ア　しばらく　　イ　まれに　　ウ　すこしく　　エ　やうやく　　オ　わかくして

B　不肯

ア　あたはず　　イ　あげつらはず　　ウ　いなめず　　エ　がへんぜず　　オ　おもんぱからず

C　方

ア　はじめて　　イ　かつて　　ウ　まさに　　エ　ならびに　　オ　まことに

D　徐

ア　おもむろに　　イ　いたづらに　　ウ　しばらく　　エ　たちどころに　　オ　ゆくゆく

問二　傍線部1「有恣言」の意味として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア　好き勝手な言葉を吐いていた。

イ　憤りの気持ちをあらわにした。

ウ　いつも人をあてにしていた。

エ　出まかせの悪口を言っていた。

オ　気にかけ憂慮を口にしていた。

問三　空欄 X に入る語として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア　且　　イ　況　　ウ　令　　エ　豈　　オ　寧

問四　傍線部2「鼓史何不改装、而軽敢進乎」の意味として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア　そこの鼓史はなぜ態度を改めないで、独りよがりの演奏をするのか。

イ　そこの鼓史はどうして賓客が列座しているのに、軽率にその前に進んだのか。

ウ　そこの鼓史はいつ衣服を改めて、宮中における規定に従うのか。

エ　そこの鼓史はどういうわけで態度を改めず、演奏の型を崩してしまうのか。

オ　そこの鼓史はどうして衣服を改めないで、軽々しく前に進むのか。

問五　傍線部3「顔色不怍」とあるが、その理由として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア　太鼓を打つ役目を終えてほっとしたから。

イ　鼓史のなかでただ一人抜擢（ばってき）されたから。

ウ　役人に叱責され、見返したかったから。

エ　世の常識など何とも思っていないから。

オ　曹操の顔を立てることが大事だと思ったから。

問六　傍線部4「衡反辱孤」の意味として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア　反対に禰衡は孤絶に甘んじた。

イ　禰衡が逆に私に恥をかかせた。

ウ　禰衡は平気な顔をして私に背いた。

エ　かえって禰衡が私をのけ者にした。

オ　禰衡は孤立するのを恥としなかった。

問七　本文の内容に合致するものをつぎの中から一つ選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア　孔融と禰衡は年齢が近く、互いにその才能を認め合う親しい友人であった。

イ　禰衡は曹操を軽蔑しており、招かれてもそのもとに行こうとしなかった。

ウ　禰衡は文才があり、代筆した文章は内容も修辞も見るべきものに仕上がった。

エ　禰衡は太鼓を打つのが上手だったので、曹操は禰衡を殺すことを望まなかった。

オ　禰衡は見事な体つきをしており、裸になると皆は驚かずにいられなかった。

●つぎの問題〔四〕は、経営学部・人間環境学部・GIS（グローバル教養学部）のいずれかを志望する受験者のみ解答せよ。

〔四〕　つぎの文章は、英文学者・随筆家で登山家の田部重治（一八八四―一九七二）が、大正時代に、自分と山との関わりについて語った講演記録である。筆者は北アルプスの立山連峰の麓で生まれ、子供の頃から山に憧れていたが、病弱だったために初めて高い山に登ったのは二十四歳の時であった。これを読んで、後の問いに答えよ。

立山に登った時、私は薬師岳の美に打たれた。（中略）全く太郎兵衛平に立った時の私は、北国の一部が*うずたかまっているという感じを抱いたというよりも、私たち人類の住んでいる大地その物が大きくうずたかまっているという感じを抱いた。つまり、私は何となく永遠というものの一角に足を踏み入れたような歓喜を感じたのである。

しかしこういう風に山の偉観に打たれながらも、私は単に普通の意味においての1自然の歎美者であるに止まった。私は自然の偉大を讃美はしたものの、私と山というものとの間に多大の距離があるのを感じた。私は依然として山を恐れた。山に寝ることもいやであった。出来うべくんばその日帰りに山を見たいというのが私の希望であった。

私は信越の山々と前後して秩父の山に、はいりはじめたということは、私に取って非常な幸福であったと思う。私は秩父の山においては信越の山々で見る事の出来ない美を味った。秩父の山の美は深林と渓谷とのそれである。信越の山々の超越的な、高邁な姿は、秩父の山の深林の幽暗と渓流の迂曲と共に私を引きつけた。私は秩父の山において一種神秘的なまた一方伝説的なものを感ずると共に、また、宇宙存在以来その間にこもって離れない山の魂という風なものに触れたような感じがした。

秩父の山の美は、十文字峠や千曲川の上流を見た時に、また深林の間に隠見する十月の日本北アルプスの淡い夢のようなA輪カクを仰いだ時に、初めて感じたのである。それから私は日本アルプスと並行して秩父の奥へ奥へとはいり込んだ。私は金峰から雁坂までの間を縦走した。そして荒川や笛吹川の奥を一瞥した。その間に私は秩父には一種の魅力と一種のあたたか味とをもって、私たちを引き入れなければ止まないものが漂っていることを感じた。日本アルプスでは、*壮厳な超越的な天に憧

憬する心持を味ったと共に、秩父では半ば超越的な半ば人間と交渉をもっているような、一種おぼろな、そこから味えばあらゆるものが融けて出そうな混沌たるものの美を感じた。

こういう風にしていること数年で、私は非常な親しみを山に見出すようになって来た。私はこう思った。山に登るということは、絶対に山に寝ることでなければならない。山から出たばかりの水を飲むことでなければならない。なるべく山の物を喰わなければならない。山の嵐をききながら、その間に焚火をしながら、そこに一夜を経る事でなければならない。そして山その物と自分というものの存在が根柢においてしっくり融け合わなければならないと。そうなって来ると、山というものの威圧は、段々、親しいものと変って来、山に対して今まで抱いた自己の弱小または恐怖が、ついには山が自分の一部であり、自分がまた山の一部であるという風な心持になりかわったのである。

これと前後して、私は人生及び学問というものについての考えが、大分変って来つつある事を感じた。私は山が好きであるから人生をのがれて、それに没頭しようという考えが起ったのではないが、それから得た体験により、自分の生活及び学問というものを統一して行きたい。それについては私のやっている学問が余りに自分の内部から出ていないものである。ただ古人がこういう風な道を辿っているから自分もこれに準ずるというような [X] 的なものである。もっと自分の真の要求というものを奥深いところに見出さなければならないということを考えるようになった。また生活の上では、も少し自分というものを考えてみなければならない。一言にしていえば、常識というもののみではどうも満足が出来ない。もっと人間性というものの奥から力強く動かなければならないと考えた。それから私はある程度においてイン襲(B)を重んじない人間になった。これは山の方の影響ばかりでなく他の影響もあるが、山から得た体験が最も強くこれを擁護し是認してくれたのである。つまり、私は山によって最も多く自然に還ることを教えられたのである。そして私は今さらながら今まで、気が附かなかった自然というものと人生というものとにおいて、驚くほど豊富な内容を認めることが出来るようになった。また北国の平原から遠望していた私の自然観の何と貧弱なものであり、私の考えていた人生というものが何と表面的なものであったかを笑わずにいられなかった。

追々（おいおい）、私の山に対する恐怖がなくなると共に、山が自己であるという風な考えが激しくなりはじめた。それが、追々、高じて来て、山から帰って来ると、益々（ますます）、自己の存在という事のみが世の中に意義があるという風に考えたくなって来た。そして、また、私はこの感じを大いに是認し、是認しなければならないように考えた。私は自然崇拝から生じた宗教の発生地では、自然の偉大がただ自己の弱小ということをのみ生み出し、そこで終（おわ）っているから、往々にして人間は振（ふる）わないのである。今日かくのごとき宗教の発生地の人心が萎（しな）びているのはその故ではなかろうかと考えた。自然の偉大はすなわち自己の偉大でなくてはならない。そこに真に私たちが山を崇拝する意義がある。そして初めて機械的な運命観を遁（のが）れて自己を確立することが出来るのであると考えた。

2 そう思った時分の私の山登りは最も乱暴であった。私は登山の真意義は非常な激しい、動的な、多少冒険的な運動を以（もっ）て行われなければならない。登山は絶頂に登る事に意義がある。もうこれで登るところがないところまで来たということに満足があるのである。雨が降っても風が吹いても行くと決心すれば、頂上まで行かなければならない。従って途中は頂上の［Y］としてのみ意義があると考えた。この考えを抱いていた時分の私の登山の忙*がしさはないものであったと今記憶している。ただ一気に頂上へ行くことばかり考えていた。私が秩父のある部分、槍岳（やりがたけ）から立山方面まで案内を連れずに行った時分は、最もこの考えが動いた時である。そして、また、人生もそのように、多少独断があっても、ただ、自己にのみ意義を見出さなければならない。そしてあくまで強くならなければならない。強いということは、ある点までは他人の考慮などは余り認めなくてよいとまで考えた。

しかし私にはこの両三年前から 3 山に対する趣味が変化をしつつあることが意識されて来た。すなわち登山に経験する内容をもっと静かに味わいたいという要求が非常に勝って来たのである。今までは渓（たに）を行き深林を通ることが、ただ頂上あるが故に止むを得ずであったが、今日は、渓谷は渓谷として、深林は深林として価値の対象となってあらわれて来るようになった。それは秩父ばかりでなく日本アルプス方面でもそういう風になった。しかし大体においてこの趣味は秩父において養成されつつ進んで来たことを認めなければならない。

それと共に私は自分が唯一の存在であるという考えを考え直して、自分というものの内容が果してどんなものであるかを考うるようになった。そして私は今まで考えていた自分は私にとってのみの自分ではない。あらゆる人にとって直接的な具体的な人間性である。すなわち唯一の実在と考えて来た自分は、実はあらゆる人に、また、普遍的な自己であることが考えられるようになった。そしてそれを考うることは、あらゆる人の存在の意義を認め、あらゆる人間の人格の尊重を意味しなければならないと感ぜられた。従って山が自分であるということは、山が普遍的な人間性の理想の表現でなければならない。という結論に到着した。私たちは依然として弱小な人間である。しかしこの弱小な人間を、刻々、高めては、この理想的な人間性に高め、それに接触せしむるところに私たちの生活の意義が存するのであると思った。

こういう風に考えはじめてから、私は、文学においては浪漫派や象徴派の詩人の態度のように、あくまで自己を歌わんがために自然を題材とする態度が必要であるという考えから離れて、一時遠ざけていた*ワーズワースの詩にあらわれたように、自然の個性を飽くまで認め、そうすることに自己との融合を歌う静かに奥まって行く態度を喜ぶようになった。この態度においてのみ最もよく山というものの心持がなだらかに胸にしみ込んで来るように覚えて来たのである。

こういう風に考えると、私の山に対する感情を大体三段にまとめることが出来ると思う。第一は山をあこがれながら山に恐怖を感じた時、第二は山が自己であり自己が山であると感じて、その自己というものの考え方がごく狭い小さな自己を意味していた時、第三には自己は狭い自己を超越した自己であるということを考えるようになった時である。

私は静かに、部分は部分としての山を鑑賞するようになってからは、山のもっている全部に神秘的な力を感じて来た。こういう心持をもって私は笛吹川の東沢の支流や、また、荒川の渓々をあるきまわった。この心持をもって大洞谷（おおぼら）や滝川谷の深林や、荒川の渓谷を歩いた。

（中略）

要するにこれは私の考えだけに止まり、他人に強いるのではない。それは私にとってのみ価値があるのである。ただ、私は今までは何かむつかしい問題の解決には、まず山にはいる習慣をもっている。そうすると、どこか問題の根本に触れる力が生

ずるような気がするのである。こうして私は、自分の生活を大体山によって、山から、つける暗示によって、指導しつつあるのである。すなわち私は山に一（ひとつ）は宗教を見出しつつあるものである。

（田部重治『山と渓谷』より。文章を一部省略した）

【注】
＊うずたかまっている　うず高く盛り上がっている。
＊壮厳な　大きくておごそかな。
＊忙がしさはない　忙しさといったら、類を見ない。
＊ワーズワース　イギリスの詩人（一七七〇―一八五〇）。自然の個性を愛し、自然讃美の名作を多く残した。

問一　傍線部1「自然の歎美（たんび）者であるに止（とど）まった」とあるが、どういうことか。その説明として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア　山の魂に五感で触れてはいたが、それだけで、哲学的な思索を深める山行ではなかった、ということ。
イ　実際に山に行かずに、遠望して観念的に山の詩を創っているようなものだった、ということ。
ウ　山と自己とを融合しておらず、山の表面的な美を愛（め）でるに過ぎなかった、ということ。
エ　山の視覚的な麗しさに惹（ひ）かれていただけで、宗教的な尊敬の念が欠けていた、ということ。
オ　好天時の山の優しさに陶酔するだけで、大自然の苛酷な面から目を背けていた、ということ。

問二　波線部A「輪カク」B「イン襲」のカタカナ部分の漢字表記について、傍線部に同じ漢字があてはまるものをつぎの中からそれぞれ一つ選び、解答欄の記号をマークせよ。

A　輪カク

ア　外カク団体。

イ　カク世の感がある。

ウ　熊を捕カクした。

エ　組織の沿カク。

B　イン襲

ア　イン険なやり口。

イ　イン果応報。

ウ　犯人をイン匿する。

エ　イン導を渡す。

問三　空欄 [X] [Y] に入る語として最も適切なものをつぎの中からそれぞれ選び、解答欄の記号をマークせよ。

X　ア　審美　　イ　模擬　　ウ　即興　　エ　一時　　オ　退廃

Y　ア　安息地　　イ　登竜門　　ウ　附属物　　エ　名脇役　　オ　大動脈

問四　傍線部2「そう思った時分の私の山登りは最も乱暴であった」と筆者が振り返っているのはなぜか。その説明として最も適切なものをつぎの中から選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア　案内人や同伴者を連れずに、地図を見るだけで、身の危険も顧みずに未経験の山に登る単独登山が多かったから。
イ　西洋の近代登山に似て、山を征服することによって強い人間になるという傲慢な気持で、登山を重ねていたから。
ウ　人跡未踏のルートに挑んで他者に先んじることだけに喜びを感じて、静かに山を味わう境地とは程遠かったから。
エ　山(自然)と自分(人間)は対等で一体になれると思い込んで、山への畏敬の念を忘れた登山が多かったから。
オ　頂上到達のみに意義があると考える冒険的な登山に偏り、多様な自然の価値を尊重する気持が欠けていたから。

問五　傍線部3「山に対する趣味が変化をしつつあることが意識されて来た」とあるが、どういうことか。その具体的な説明として**不適切なもの**をつぎの中から一つ選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア　頂上を究めるだけでなく、途中の渓谷や深林を歩くことにも充実感を覚えるようになってきた、ということ。
イ　自分という人間は、他者から独立した唯一の実在ではないと考えられるようになってきた、ということ。
ウ　あらゆる人間の存在意義を認め、その個性を尊重することで人間的に成長できると思うようになった、ということ。
エ　山は自己であるという思い上がりが薄れ、山を恐れる謙虚な弱者に戻って、敬虔(けいけん)な信仰心が芽生えた、ということ。
オ　自己を表現するために自然を題材にする詩よりも、自然の個性そのものを描く詩に惹かれるようになった、ということ。

問六　本文の内容に合致するものをつぎの中から一つ選び、解答欄の記号をマークせよ。

ア　秩父の山を知ってからは、日本アルプスの高峰よりも秩父の渓谷や深林のほうが遥かに魅力があると感じた。

イ　山が自分であるという実感を深めるためには、独りだけで山に寝泊まりする厳しい修行が必要だった。

ウ　自分の人間関係や学問はすべて山を通じて出会えたものであり、山なくして自分の人生はなかったといえる。

エ　自然は偉大で人間は卑小な存在であるという考えでは価値ある自己を確立できない、と考えた時期があった。

オ　人生で難しい問題が生じたときは、解決のために山に行くようにと弟子には指導するようにしている。

問七　二重傍線部「狭い自己を超越した自己」とあるが、どうすることでそれが実現できると筆者は考えているか。三十字以上、四十字以内でまとめ、解答欄に記せ。ただし、句読点や記号も一字と数える。

（下書き用）

40　30